

医見拝聴

医師と患者の間 はなま

日本医学ジャーナリスト協会幹事

高山 美治

「私の娘婿を助けてください」と、女性の上ずった声を受話器の向こうで響いた。私が勤務していた新聞社の副社長の紹介だという。43歳になる娘婿が会社の定期検診で高アマミラーゼ血症が見つかり、精密検査を受けるように指示されたのである。義母は、小学校の同期生が高アマミラーゼ血症がきっかけで、「あの病気が見つかり、あつという間に亡くなつて」と、婿どのが「あの病気」にかかつているかのような狼狽ぶりである。1カ月前のことであった。

アマミラーゼとは膵臓が分泌するでんぶん分解酵素である。膵臓に病気が起こると過剰に産生されて、血液中が増えてくる。基準値は、60〜200単位だが、男性のそれは750単位の高値だという。高アマミラーゼ血症から疑われるのは、急性および慢性の膵炎である。近年では先述した膵臓が原因で高アマミラーゼ血症が起こるケースが多くなつてきた。膵臓の予後はきわめて悪い。彼女が、「あの病気」で押し通したのは、「膵臓」の宣告を恐れてのことであった。ただ、「症状は全くない」という一言が、病状を判断するにあつての明るい材料ではあつた。

私は、仕事で親しくしている肝・胆・膵の専門医である都内のS大学のI・M教授を紹介した。その後、彼女から検査の経過を報告した丁寧なお手紙を2通いただいた。そして、つい1週間前、優雅な文章を書くこの女性が、取り乱したように、電話口で「気が不安と不満を吐き出したのだつた。」

「婿は、先生から『何ともない』と言われ、病名も聞かないで帰ってきたんです。なぜ大丈夫なのか納得できる説明をしてくれないんです」。義母は、高アマミラーゼ血症イコール膵臓と決めてかかっているらしい。これでは家族の間に亀裂が生じる恐れがある。

そこで、私は、娘婿に関する情報と「何ともない」という結論を結ぶ一本の線を引いて、電話口で推測を話した。唾液腺型アマミラーゼの増加による高アマミラーゼ血症という考え方である。唾液腺の病気になる原因不明（特発性）で唾液腺からのアマミラーゼが増えるケースである。特発性唾液腺型アマミラーゼ血症の予後はきわめて良い。私は、「お婿さんは嬉しくて、『何ともない』という一言だけが記憶に残つたんですよ。癌の宣告を受けた患者さんは、癌しか残らないことがしばしばありますよ。医師の方は、十分に説明したつもりなんでしようが」と話した。

こうした事情をI教授にメール送信したら、早速に返信があつた。「診断名は特発性唾液腺型アマミラーゼ血中停留症。肺臓でアマミラーゼが上昇することがあるのでCT検査を行ったが異常はありません」。何らかの理由でアマミラーゼが体の外に出にくいために高アマミラーゼ血症が起こるのである。

そこで、私は、「徹底的に調べた上での『何ともない』ですよ」とのファックスを送つた。数日後、義母と娘婿から「これで安心しました」との手紙が前後して届いた。

千葉県医師会健康宣言

みんなが高めるいのちの価値

千葉県医師会は、こんな活動を推進しています。

地域連携

地域に開かれた医師会として、患者さんの団体やボランティア団体、行政との連携をさらに深めます。

情報公開

患者さんと医師との一体感を強める情報開示につとめ、IT時代にふさわしい医師会をめざします。

新世紀の医療へ

高齢化社会に対応した新しい健康価値観の創出、環境や生態系との関わりを考慮した医療を追求します。